

学歴についての諸言説

—— 学生答案の質的考察 ——

薬師院 仁 志

Les discours sur le Diplôme:
à travers les compositions éudiantes.

Hitoshi YAKUSHIIN

I. はじめに

本稿は、現在の日本において、学歴というものに関してどのようなリアリティが成立しているのかを考察するひとつの試みである。その際の資料として、「教育社会学」の定期試験において大学生たちが書いた答案を利用している。ただし、本稿の主目的は質的データの紹介であり、加えられた考察は、あくまでも仮説ないしは試論にすぎない。

II. 問題提起

私は、過去四年間、私立桶の水女子大学（仮名、略称：桶女大）で「教育社会学」担当の非常勤講師を勤めてきた。この科目は教職科目として開講されているものであり、受講者には社会学や教育社会学を専攻する学生はいない。文学や家政学を専攻する学生が、教職単位のひとつとして半期十数回の授業を受けるだけである。したがって、試験の答案の水準も高いものではなく、授業で教えたことがひととおり書いていけば最優秀といったところである。

試験の設問は、毎回少しずつ異なるものの、広い意味では、すべて〈学歴社会〉に関するものであった。通常、試験の答案を読む際には、設問に正しく答えているか否かに注目する。公平な採点者にとって、設問から外れたような勝手な記述や、受験者の個人的感想の記述などは、詳しく読むべき対象ではないのである。だが、四年間で計八回の試験を実施するうち、そのような記述には、いくつかのパターンがあることに気づくようになった。もちろん、授業で習ったことだけをそつなくまとめたような答案も少なくない。しかし、それだけですまらずに、多く書くことによって何とか高得点を得ようと努力したような記述、あるいは、あまり勉強せずに試験に臨み、関係のありそうなことをその場で何とか捻出したような記述などは、まるで互いに申し合わせでもしたかのように、あるパターンを反復しているのである。それらは、明らかに、何らかの社会的な作用によって産出させられた言説を構成していると考えざるをえないのである。そこには、学歴というものに関して成立している社会的なリアリティが表明され、反復されているのである。

もちろん、学生たちの記述は、試験の答案として書かれたものである。それを書かせた直接

的な動機は、試験に合格したいということであるにちがいない。だが、だからこそ、ある意味で真剣なのである。各受験者は、自己の考えの及ぶ範囲で〈学歴社会〉をとらえようと懸命なのであり、〈学歴社会〉という対象に一般的な説明を加えようとして、利用可能な根拠を思いつく限り総動員しているのである。すなわち、試験場があたかも告白室のような機能を果たすことによって、学生たちから“学歴についての真理”の言説を引き出すことを可能にしているのである。学生たちは、純粋に自己の信条や心情を吐露しようとしているわけでもないし、自らの解答を心底信じているわけではないであろう。だが、そんなことはここでの問題ではないのである。重要なことは、一般的な説明を目指しての、あるいは〈正解〉を求めての「思いつく限り」や「自己の考えの及ぶ範囲」が、ある有限のパターンの枠内に収まるということである。つまり、社会的な作用によって、ある種の言説が産出されているということなのである。この点に注目しなければならない。そして、そのように考えるならば、期末試験の答案こそ、言説分析の好個の対象だととらえることができるのである。

本稿の主要な任務は、手元にある千数百枚の答案を、採点という視点から離れて再検討し、その分析を通じて、学歴に関する社会的リアリティの諸形態を浮かび上がらせることである。ただし、本稿が提示することになる諸類型は、多様な言説的要素を整理したものであり、答案そのものの分類ではない。一枚の答案に複数の要素が混在していることも少なくないのである。すなわち、一枚一枚の具体的答案は受験者個人の〈作品〉かもしれないが、言説的諸要素の方は答案記述者個人の営みに還元することができないのである。問題は、学歴にたいする何らかりアリリティの形成を、言説編製のなかに見いだすことなのである。

Ⅲ. 学歴言説の諸形態

本章では、具体的に反復されているいくつかの記述パターンを例示する。問題は、以下に引用する答案記述が内容的に正しいか否かということでもなければ、記述者自身が記述内容を信じているか否かといったことでもない。そうではなくて、本稿が目指すのは、ある種のパターンが実際に反復されているという事実性である。正しかろうが誤っていようが、人々が信じていようがまいが、言説の反復が社会的なリアリティを構成していることには違いないのである。現在の日本において学歴というものに関してどのようなリアリティが成立しているのか、以下に引用する具体例から読み取るべきはそのことに尽きるのである。

(i) 庶民感覚型

この形態に属する記述の基本的な枠組は、進学競争が過熱する原因を、「大企業への就職には〈有名〉大学が有利」だという点に求めることである。誰でも考えつく説明であるが、問題は、その内容がどのように語られているかという点である。考察は後ほど行うことにして、とりあえず具体例を列挙してみると、以下ようになる。〈学歴〉の価値にたいする羨望と不信の入り交じった感覚を、以下の諸記述から読み取ることができるであろう。

イ. 今の就職がきびしい時代高学歴じゃないと一流企業への道はふさがれてしまう。これは今年就職活動をしていた人に聞いた話だが、二流、三流大学だと、会社説明会にもい

けないそうだ。関西でゆうとレベルの高い有名国公立大数校と私立4校だけかぜで行われたりするらしいです。その他いろいろ信じられない話の数々を聞きました。二流や三流の大学に行っている人だって、すばらしい人やいい人材がいるというのにやはり大学名である程度のところまでは切るそうです。このような現実的な話を聞くとやはり今の時代は学歴が必要であるんじゃないかと思う。学歴で人を判断するのは一般的にはどうかと思うが、これが現実の厳しさである。これが改善される日ははやくきてほしいように思う。

ロ、日本における大学への進学熱はここ数十年の間にどんどん激しくなっている。なぜなら、学歴の格差がそのまま所得と身分の格差につながっているという事実があるからである。例えば、東大卒の行先は圧倒的に大企業や、中央官庁である。結局は、生まれながらにもっている能力、人格などよりも、社会はどこで学んだのかを重要としているのである。雇用主は、卒業した者を、彼らがどんな知識や能力をもっているかでなく、どの大学のどの学部を出たか、によって判断するという、社会的な評価によって、厳しい上下の順位をつけているのである。ここで私が疑問に思うのは、「いい大学」を出た者は、確かに能力・実力のある人たちばかりである。だからといって、その人たちの人間性も、「いい」と言えるのだろうか、ということである。もし、そのことを聞いてみたなら、誰もが口をつぐんでしまうことになるだろう。確かにすばらしい人もたくさんいる。しかし、結局は、試験の限られた時間の中で、頭に蓄積した知識を、どれだけ手際よく、使いこなしていけるか、ということであって、ああだ、こうだ、と考えて作り出していく人間らしい創造性などは、必要でなくなってしまったのではないのだろうか。

ハ、現代の日本の社会では高学歴イコール高収入という風にみられるが、それが当り前の世の中になってしまっている。高学歴の人間は本当にその大企業に貢献できるだけの人間なのであろうか。低学歴の人間は大企業を背負えるだけの脳力がないのか。現在、社会は学力によって人を選んでいるわけである。東大卒、京大卒とついただけで、その人があまりよい印象の人間でなくても、そこに格がつくのである。大企業になればなるだけその格を要求するのであろう。だから、要は内身ではなく、変わらない、格ともいえる過去の実績が必要なのである。ただどこういう社会の在り方は絶対正しいやり方ではない。こんな見方で人間を計れるわけがないし、その上、世の中ですると、勉強をどれだけして高学歴であるという事よりも、社会にでるまで、自分はこれだけの事をやり遂げてきて、社会にたいして、こういう考えがあるという事の方が、重要であるからだ。

ニ、学歴イコール人間性という概念が今の学歴社会をつくりあげてきたと言える。大企業へ就職したいという希望者が集まった時、相手に勝つには学歴だという考えがおこる。これは実際に企業側が高学歴ということにこだわり、優先的な目で見えるからである。このようなことは今日では普通として受けとめられ、それによって学歴のレベルは上がり、どんどん学歴社会が進んでいっているのである。しかし、学歴社会というものを見直していこうとする企業も増えてきている。学歴より、その人の人間性や実力を重視すると

いう姿勢である。このような考えの持ち主も増加しつつあるが、現在に至るまで築かれてきた「学歴を問う」という社会の一般的考えを崩すのは難しいことである。なぜなら、「学歴を問う」という考えを否定できない部分も実際にはあるからである。しかし、高学歴を持つ人は、人間的にも優れているという思い込みは改善しなければならない。

ホ. 今日の世界では、学歴よりも実力と言われている。実力というのは、実際に仕事を何年もやらせてみた上でないと、誰にそれがあるかわからない。しかし、実力をみるために、試しに二、三年働いてみせるわけにもいかないから、採用する方は、やはり学歴とそれを確かめる試験を判断の基準にしてしまうというのが現実である。学歴がないから、その人間の能力が低いということは決してない。学歴でその人間の価値がきまるわけでもないし、学歴があっても必ずしもその人が、人格的に素晴らしいとは言い切れない。しかし、いずれにしても、学歴を持つ効果は大きく、人々の社会的な階級と密接に関係しているのである。身分階級がなくなったからといって、階級がなくなってしまうわけではない。学歴社会が存在している限り、それは社会的な階級、つまり就職という段階において、存在し続けていくのである。

ヘ. 私は今はやっぱり学歴社会だと思うから就職するには上の方の大学はゆうりだろうと思う。でも人の価値は勉強ができるかできないかの問題じゃないから、その人個人を正しく判断するためにも学歴だけで決めるのはやめになればよいと思う。

ト. 日本の社会の評価は、その人間が「何をしたか」ではなく、「何であるか」に重点を置いている。つまり、その人間が今までにどのような考えを持って生きてきたということよりも、どのランクの大学（学歴）であるかを重視する。実際にそれは就職活動において顕著に現れる。早い時期から真剣に就職活動をしてきた人より、ほとんど活動していない有名大学の人が先に大企業への就職が決定するというのを見聞きしたことがある。

チ. 学歴、特に東大をはじめとする特定大学卒ということがこれだけものをいう社会では、学歴の格差がそのまま身分の格差につながるのである。企業の特定大学好みが消えない限り、一流の大学のレッテルを手に入れようと殺到することは、まちがいないのである。社会では、機会均等という言葉が使われるが、本当の機会均等は、エリートのない社会においてのみ、現実に与えられるのである。

リ. 学歴は今の社会において必要である。まず就職をする時、企業側が学歴を見てくる。これは、学歴でその人を判断していることになる。だから、学歴がよければ一流企業に入社できるという考え方が学生の中に広まっているのである。これらの考え方が学歴社会といわれる日本を象徴しているのである。こうなると一般の人々は社会的地位を認められるためには、有名大学をねらい高学歴を自分のものにしようとする。だから今は学歴というものは社会的地位を決める時、手段の1つになってしまっているのである。また、人々のイメージがかわって社会の異常に気づかない限り、学歴と社会的地位の関係は、切っても切れない関係にある。もっとも、企業が意識的に競争させることにより優秀な人材発掘の糸口にしているといっても過言ではない。この企業に今の社会ははめられているため、企業側が考えを改めない限り、この社会は続くであろう。

同様の記述が、試験をするたびごとに、夥しく登場するのである。一見すると、上の諸記述は、社会批判であり企業批判であるようにも見えるし、学力偏重の選抜制度への批判のようにも見える。あるいは、誤った社会通念にたいする警告のようにも見える。たしかに、記述者の意図はその通りであるかもしれない。自分たちの認識した現状を、「とても悲しいことである」と表現した者もいたし、「企業がある一定レベル以上の大学出身者しか雇用しないというのは許せないと思う」と怒りをぶつける者も多い。だが、これらの記述自体の基本的な論旨は、道義や理想に基づく批判ではない。そこには、社会や企業にたいする抵抗や叛骨など、微塵も存在しないのである。むしろ、これらの記述を支えているのは、大企業や〈一流〉企業への就職にたいする無媒介的な欲望である。極端に言えば、学歴がなくとも、学力がなくとも、人格や人間性や考え方という理由で自分たちも大企業に入れるようにせよということである。言わば、〈学歴エリート〉にアンビバレントな感情を抱く庶民感覚の表明なのである。結局、彼女ら自身が「〈一流〉大学から大企業」へという欲望の担い手なのであり、無自覚でありながらも〈学歴社会〉の成立に自ら参与してしまっているのである。実際、答案のなかには「誰もがあこがれ希望する大企業」などという表現さえ登場するのである。

だが、さらに重要な問題がある。すなわち、大企業や〈一流〉企業への欲望の中身が、かなり曖昧なのである。たしかに、「高収入」という表現は登場するが、それとて具体的な知識や情報に基づいているわけではなく、「大」企業であれば収入も「大」であろうという大雑把な感覚にすぎない。そもそも、大企業だ就職だと論じたてるわりには、就職において不利な扱いを受けることが、貧しい生活といった具体的な不安に結びついているわけではないのである。まして、失業不安から生活苦に怯えているというような事実など全く伝わってこないし、特定の仕事に就きたいという夢が表明されているわけでもない。欲望の対象は、「大」企業や「一流」企業、あるいは「有名」大学といった、きわめて曖昧なものにすぎないのである。すなわち、具体的な欲望——たとえば金銭や権力や職業内容にたいする欲望——がそれを実現するための対象や手段に向かうのではなく、「大」や「一流」といったイメージが、抽象的で曖昧な欲望に形を与えているにすぎないのである。上の諸記述が表明している内容を表す最も的確な表現は、“就職において〈一流〉ブランドをゲットできないことにたいする不満”であり、〈実質〉では満たされることのないブランド志向そのものなのである。この場合、ブランドのレッテルがあってはじめて、人々は自分が何が欲しいのかを具体的に知ることができるのである。

進学競争が過熱する原因を「大企業への就職には〈有名〉大学が有利」だという点に求めること、このような説明が社会的なリアリティを獲得していることはたしかであろう。その内容が客観的事実であろうがなかろうが、信じられていようがいまいが、多くの人に繰り返して語られていることは事実なのである。リアリティの成立要件は、ある形態の言説が実際に反復されているという事実性にある。そして、重要なことは、この種の言説のリアリティが、人々の欲望と強く絡み合っている点である。多くの場合、言説の内容の真偽を確認しようとする手続きは省略されているかいいかげんなものかのどちらかであり、しかも、その内容の

正当性が信じられているわけではない。にもかかわらず、「有名」大学や「大」企業にたいする欲望だけは強固なのである。すなわち、言説の方が、輪郭のはっきりしない欲望に形を与えているのである。たとえば、我が子に「勉強しなさい！」とけしかける親たちは、「いい学校に行かないといい会社に入れないでしょ！」と繰り返すことによって、自分たちの欲望に具体的な内容を追補することができるのである。人々は、何らかの社会的な作用——その機序の詳細はともかく——によって「〈有名〉大学から大企業へ」という言説を反復させられており、そのように語る／語られることによって、自らの欲望を誘導され、管理されているのである。これは、欲望の次元に構成されたアリティである。つまり、言説によって、リアルな欲望が社会的に構成されているということではないだろうか。

(ii) 青年の主張型

このタイプは、〈純粹型〉こそ庶民感覚型ほど多くはないのだが、過半数の答案にその片鱗が顔をのぞかせるのが特徴である。授業で習ったことをひとつとおりに書いた後、おまけのように添えられることもしばしばである。少しでも得点をあげようという試みであろう。要するに、教師に評価してもらおうべく、試験で書けばよい（と考えられている）答案の典型なのである。以下に、そのいくつかを例示する。

ヌ. 現代高学歴社会の中で育った子供たちは、果して“人間”としてよりよく成長しているのだろうか。幼い時から、よい大学に入学するためだけに教育を受けてきた子供たちは、最終段階の大学に入学して、その後、自分が実際にどう生きていくか、分からないという。勉強、勉強で缶詰めになり、人をけ落として育ってきた子供の心が広く大きなものであるとは言えない。教育とは勉強ができるできないの問題ではなく一人一人の個性、その人だけが持っている魅力を引き出して、より一層、磨いていくことである。実際、そういう人間を育てていくには、一青い空、白い雲、緑の木々、鳥、虫たち、そして水一つまり、自然と触れ合わせるのだと考える。現在の教育には、この自然との触れ合いがあまりにも少ない。学歴を重視して人間が人間として成長するはずがない。

“見せかけ”だけの学歴虚像論の大きな問題点である。真っ青な空を見て、きれいな花を見て、心やすらかにならない人はいない。しかし、それに目をやっている余裕すらなく勉強一途になっている子供たちが、未だぞっとするほど、存在する。“勉強ができる”というみせかけだけの虚像一人間ではなく、もっともっと心広く大きく自然と触れ合える一実像一人間が〇なのである。まずは自然破壊やエコロジーなど、身近に取り上げられている社会問題から、自然との触れ合いの場を増やしていくことが、今後の一番重視する必要のある課題である。そうすれば学歴がどうのこうのという小さな器の話ではなくもっと広く、大きな意味での人間が、育ち、地球が大きくなっていくのである。

ル. 私達は個人の人格が尊重されることなく学歴が人格を形成するような学歴の中に人格が含まれている不思議な秩序社会で何かが違おうとぼやきながらもそのできあがった日本全体を変えることができずにそしてそれを黙認し、自分の子供に学歴を求める親に育てられているのです。教育は人間を人間的に完成させるためにそのためのものであ

たのです。そして、学歴はそのあとについてきたのです。しかし現実社会の中で人々が教育に対して抱く欲望は学歴を作るためのものです。試験に合格するためのものです。自然とみどりにあふれた自由である学校より、社会に出た時（出る時）持っていると有利である有名校出身という学歴なのです。この本来抱くべき教育に対する欲望と社会に適応していくために抱く欲望とに差があることが、大きな問題であると私は考えます。さらに考えれば世界的に見てすぐれた数学的学力を身につけた人間を作ることをやめ、世界に通用するような語学（これも文法的なことより人と話すことに主体をおいたもの）や人との対話のやり方などに重点を置いた使える知識を身につけた人間形成を目指せば、世界の中での日本社会全体の上昇につながるのではないかと私は考えます。

- ヲ. 現在、様々な職業で活躍している人の中にも、大卒ではない人も多い。本来、教育とは、小学校、中学校の段階で、様々な職業の内容をビデオか何かで見せてあげる授業をつくり、高校では、将来の展望をある程度、決めさせて、その上で、夢に大学が必要であったり、決めかねている場合にのみ、大学に通えばいいのである。
- ワ. 本来は、人生の中であらゆる危険、困難だとか、失意に耐えられるだけの、基本的な知恵と勇気をもつこと、そして自己能力開発をめざすことが教育であるはずなのに、将来の経歴を大きく左右すると信じる大学入試、この試験万能主義の選抜機構ののっつられて、18歳のある一日、その分岐点だけを目ざした教育だけが良しとされている。小さな頃から、個々の差を無視した、同一の教育目標で同一の期間に同一の指導法で完全学習を強いられているのだ。こういった教育状況がいわゆる落ちこぼれを生みだしたり、ストレスを持たせ、いじめ、非行といった数々の問題を引き起こしている。そんな状況の中で生きる子供・生徒たちは、いたましい「校害」の犠牲者なのだ。そして、皆が人生の成功をにぎる鍵であると信じて崇拝してきた「学歴」、そのものこそがこの「校害」の源であり、その信仰を打ちこわす意識改革が、今、必要なのだ。まだこれに気づいていない人は一刻も早く目をさまさなければ、日本は本当の意味での実力主義に近づけないし、人間らしい人間は育たないであろう。「学歴」が本来あるべき人間をうちこわすなら、学歴なんていらぬ。学歴に意味はない。
- カ. 今、人々は、学歴というものに執着しすぎていると思う。本来の教育というものを無視して、学歴だけを追い求めることに、一体どれほどの意味があるのだろうか。そもそも、学歴というものは何なのだろう。今の日本では、自分をランクづける1つの重大な要素になっている。要するに学歴が自分の象徴となっている。それゆえに学歴社会をのぼりつめた者がエリートとしてちやほやされる。逆にそうでない者が落ちこぼれとみなされる。人々が必死になって学歴を求める理由はここにあるのだろう。自分が社会にエリートとして幅をきかせられるように必死なのだ。しかし、そうではいけないのである。学歴社会の頂点に立った者がエリートというのは、人々の潜在意識の奥に植えつけられた、ただの幻想なのである。ただ単にエリートを求めるだけで、学歴社会をのぼりつめたにせエリートたちが、本当の意味での落ちこぼれかもしれない。にせエリートたちは、学歴という保護のきかない場所では、何をしたいのかかわからず、途方にくれることだ

ろう。人々があまりにも学歴を求めすぎるから教育は本来の道を大きくはずれてしまった。その人の象徴で、その人の人格まで決めてしまいかねない学歴を求めるのは、無理もないことだろう。今の世の中で、これだけ重要な意味をもつ学歴を欲しくない人間はいない。しかし、早く気づかねばいけない。これらがみんな幻想だということに。そして今持っているエリートの欲望を学歴社会にではなく、本来の教育にぶつけなければならない。人々は、学歴エリートよりも、人間として本物のエリートになりたいという欲望を持つべきである。エリートを学歴のみに求めるのはあまりにも範囲が狭すぎる。狭い範囲のエリートより、人間として全体がエリートの方がよりエリートだということは、誰もが理解できることだと思う。人々が学歴からエリートを求めようとして、これだけの学歴社会が築かれたのだから、その欲望の的を人間としてのエリートという所に持って行けば、今の学歴社会は衰退し、本物の教育というものを手に入れられるようになるだろう。

- ヨ. 現在、教育は学歴に姿を変えていると思われる。教育になりすました学歴という象徴的価値のために、どれだけの生徒が縛られていることだろう。自分が本当に学ぶべきことを見失ってしまっているのだろう。このような、形だけ、見ためだけの学歴の存在を、私は非難せずにはいられない。また、学歴によって、個人を判断する社会ができあがってしまっていることに怒りを覚える。このような体制を改革しなければ、やがて、自分自身が物事を正しく判断する能力さえ失ってしまう社会になるであろうと私は考える。
- タ. 今日の教育の欠点として、日本の教育は大学入試を最終目標にした受験体制型教育であり、それは塾・予備校の存在と相まって、小・中・高校の生徒の生活をむしばみ、何よりも高等学校を空洞化していると思われる。これからは、このような誤った教育観から脱却し、「人間尊厳性」に目覚めさせ、真の生きがいを与える教育を目指さなければならない。
- レ. 今日の日本の教育において学歴と社会的地位は、きってもきれない関係にある。ほとんどの場合、何をしても結局学歴がものをいう世の中になってしまっている。大学卒であるか高卒であるのか、あるいはどこの大学を卒業しているのかそれだけで人間の中味までわかったように人が判断され、差別されている。このように大学を卒業すれば、そしてあの有名大学に入れば、将来の社会的地位は確実なものになるという社会的風潮が日本の現代の教育に悪影響を与えているのだ。つまり、小、中、高校という教育の場がただ単に最終目的である有名大学に入学するための単なるステップにすぎず、本来の「教育」を意味するものではなく受験競争のためだけの「学校」となってしまっているのである。とにかく、高学歴であるほど社会的地位が保証されるのだという考えが、今日の教育を無意味なものにしてしまっていると思う。

この種の答えは、「教育」や「学歴」に関連する出題であれば、たとえ具体的な設問が何であろうとおかまいなしに必ず登場する。これらの記述の基本的な姿勢は、「本来・本物・真・本当」といった言葉で、〈学歴社会〉を批判することである。非難すべき受験教育や〈学歴社会〉にたいしては、その内容——その妥当性はともかく——が詳しく述べられる場

合もあるし、どの答案もそれにたいするとらえ方はほぼ一致している。しかし、「本来」や「本物」の方は、内容がきわめて抽象的である上、答案ごとにかなり異なるのである。つまり、本来の教育や本当の勉強の中身を詳しく論じるのではなく、現在の〈学歴社会〉が本来の教育——その内容が何であれ——から逸脱しているという主張に終始しているのである。そして、本来の姿から〈逸脱した〉状況を、自分以外の他人が抱く誤った認識を根拠に説明しようとしているのである。

もうひとつの特徴は、記述のスタイルが、意見や提言という形をとっていることである。実際、「私の意見」や「自分の考え」という言葉が明示されることもしばしばである。そしてその際、他者を無理解者に仕立て上げることで、語る内容を自分の意見にしているものである。極端な場合、あたかも自分自身が教祖でもあるかのごとく、「一刻も早く目をさまさなければ！」と語るのである。

だが、もし自分以外の者が本当に無理解者であったなら、こんな記述は登場しない。試験の答案に、誰にも理解してもらえないようなことは書かないのである。多くの大学生たちは、それほど愚直ではない。

結局、この種の答案は、「本来・本物・真・本当」といった高尚な——実際には抽象的な——理念を抱いている私という人物を評価せよというメッセージなのであろう。もちろん、答案記述者自身は、それほど確信犯的な意図を自覚していないかもしれないが、記述者の想定する“試験の評価基準”がそこにあることはたしかであろう。この形態の言説もまた、何らかの社会的な作用によって反復させられたものであるにちがいない。受験競争に深く拘泥することは賞賛されるべきことではなく、そこでの勝利をスポーツ大会での優勝のように誇らしげに語ることは道徳的非難の対象となるということ、これも、今日の学歴社会のリアリティなのである。たとえば、「私が東大に合格するまで——偏差値40からの出発と夢の大蔵キャリアへの道——」などと題して、予備校の先生の熱血指導や母親の献身的な協力をたいする感謝と自らの向上心を語るなどという演説が、「青年の主張（青春メッセージ）」に登場することはありえないであろう。受験教育や〈学歴社会〉は、誰もが「私はそれを批判する」と語るべき対象として（道徳的に）制度化されているのである。この言説の反復によって、そのような道徳的リアリティが成立しているのであろう。

逆に言えば、受験教育や〈学歴社会〉が非難されることによって、どこかにあるかもしれない「本来の教育」や「本当の能力」なるものが救出されているのである。道徳的リアリティの成立は、基本的に、この救出作業に依存している。〈学歴社会〉への非難が、その裏で、「本来の教育」なるもののリアリティを支え、ひいては、それを探し求める営みを正当化していると考えられるのである。言説の反復が、「本来の教育」や「本当の能力」といった、それ自体では抽象的ものに、何らかの輪郭を付与しているのである。

(iii) 身の上話型

この形態に属する記述の基本的な枠組は、まわりの大人たち——特に親——が「勉強だ進学だ」と自分たちをけしかけるから、学歴社会が生まれるのだというものである。自分や知

人などの私的な体験が直接語られる場合と、やや一般化して記述される場合とがあるが、いずれの場合も、周囲の大人たちに強制された進学競争を、多少とも否定的に語るのが特徴である。以下に、そのいくつかを例示しよう。

ソ. 今の日本ではよほどの事情がない限り、大多数の人間が、大学に入る。しかも、大半が本人の意志ではなく、親の意志によってである。中には、自分の意志で入るものもあるかもしれないが、半数以上は親がひいたレールの上を走るが如くただ流されて大学に入る。また社会も能力=学歴という考え方でいる。企業も「能力のある人材を」と言っているが、結果的にその能力とは学歴の事を指し、いかに企業の歯車の1つとなって働いてくれるかという事が目的なのである。このような現実を見た大人達（ここでは親）が、子供に対して学歴社会に順応すること、またその中で他人をだし抜き、生き残る事を要求する。大人がよく口にする「いい大学（会社）に入るにはお前達のためだ」という言葉の裏には、大人達の“後の自分達の生活において安心できる生活を保障してくれるものを得たい”という欲望がひそんでいる。生きていく上で、自分達（大人）が苦労しないために、子供達に学歴社会を正当化して教えこんでいるように思う。

ツ. 学歴さえ持っていれば、いつか役にたつ時がくると私は母に言われ続けている。この場合の学歴は身につく技術のことではあるけれども、それがあることによって社会的に安心でき、誇れるからだと言っている。母は何か他人に誇れるものを、欲しているのではないだろうか。これも一つの欲望だと私は思う。受験産業の中で一喜一憂している親達は、子供を自慢したい、自分が育てた子はこんなにも偉く、他の子とは違うということを知らしめたいと思っている。子供達は別にこれといった欲望を持ってはいない。単に周りに押し流されている。大人達による教育・学歴への限りないあこがれの想像が、今は渦巻いているのではないだろうか。自分や子供達の未来を少しでも明るくし、他人が感心してくれるように考えてもらうために学歴という名を飾らせる必要があるのだと私は思う。飾るには、少しでも輝かしい方がよい。そのために人は多額の金、労力をつぎこんで、少しでもハクをつけようとする。飾りのついた自分達は周囲に誇り、周りから色々と良い方向に想像してもらい、自分達はこういうものなのですよと言うことができる。しかし、他人に良く想像してもらうために、子供達に無理矢理教育を押しつけるのは、子供にとっては地獄とも言える。他人にどのように見てもらい想像してもらうかということに気にしなくなればよいのだが、他人の目を気にする民族性からいっても難しいことだろう。

ネ. 今の自分よりも子供には、もうワンランク上の生活をさし、安定した生活を送ってほしいと願うのは当然だと思う。安定した生活を送るには、一生ついてまわる事になる学歴、高学歴が必然的に要求される。だから親達は、幼い頃から塾へ通わせ、お受験をさせ、自分はそっちのけで子供にばかり手をかける。親は、幼い頃から子供の将来の話をし、子供もまた、よい点をとって親が喜び、ほめられる事により、自分も満足する。進学競争のことを非難しているが、私もまた、高校受験という進学競争をしてきた。確かにその時は、偏差値ばかり気にしていたし、あの子には負けたくないとか、いろんな思

いがあった。でもこうして、競争するのも必要な事だと思うが、幼い子供を家にとじこめ、しかり、机にばかり向かわせているのは、バカらしい事だと思う。

ナ. 人々は、教育や学歴に対して欲望なんか抱いているのだろうかと思う。確かに抱いているかもしれないが、それは本当に人々が望んでいる欲望なのか疑問に思う。私自身高校へ入った頃から周囲の目が変わってきた。親は、今の時代大学を出ていないと世間からバカにされるなどといい始めた。実際世間は他人の子供の教育にも興味深々で何かといえどこの大学へ入ったなどと私は注目的だった。私はそんな環境がイヤでしょうがなかったが、将来のことはかいもく見当もつかず、とりあえず、大学へでもというように感じでした。受験競争の最中にいる人はみんな自分の目的をもっているのかと思うが、そんな人はごく一部にしかすぎず、結局有名な大学へ入ろうとしているのだと思う。

ラ. 今日の日本において「学歴社会」という言葉をよく耳にするがつまりそれは、少しでもワンランク上の学校に行き、ワンランク上の会社に行き、ワンランク上の生活をする。延々と続く欲望に重ねられる欲望。そしてそれは「人よりも良い」と思われたいがための自己顕示欲ともとらえられる。親のエゴというものから、幼い頃からいわゆる「英才教育」というものを受けさせられ、一流幼稚園から一流会社までのレールが敷かれており、その事によって、その子供達が「学歴」に対して周りから賞賛され続ける事で、又新たな「欲望」を持つ、そういうことの繰り返しだが、この先ずっと起こって行くのだろう。確かに親が「子供に楽をさせる」為にそういう教育を行っている部分もあるのだろうが、大部分は「人から子供をほめてもらいたい」という親の「名誉欲」からきているのだと思う。子供達が自分達の考えで一から生きていくとするなら、こんな「学歴社会」という言葉すら生まれなかったような気がする。でなければこんなことを論じている私も大学に来ないはずだからである。

ム. 子供は、生まれてから、ロボットのように親の思うように動かされている。小さい頃、実際にはそのとおりにならないとしても「幼稚園の先生」「スチューワーデス」など様々な夢を抱く。しかし、そんな夢を追い求め、成長していく子供は少ないと思う。親はまず子供の将来高収入でいい会社に就職させたいということを考え、いろいろな塾にかよわせ進学校である高校に入学させ、いい大学に入れる。私は子供が機械のように扱われていると思う。東大は日本の中で一番えらい大学だと小さいころから教えられてきた。確かに、東大に合格できるような人は、数学・理科など、すばらしいくらいにでき、頭はえらいと思う。でも、東大を卒業してエリート会社に就職して、本当にそれがすばらしいことなのか私は不思議に思う。そういうことだけ考えて生きている人はかわいそうだと思う。私も、小さい頃から、塾の先生や、両親とかに、高校や大学は就職するまでの途中の段階であってどんないい所に就職するかはその途中の段階で決まると言われ続けてきた。私は、そんな親の期待に答えようとノイローゼになるくらいに息苦しく、いつの間にか裏表のある最悪の人間になっていった。そして近所の人たちには会う度に、「〇〇ちゃんはえらいから、きっといい大学にはいるんやろうね」と言われ続けた。私

は、どこかに逃げてしまいたいほどおびえ、誰かに助けを求めたいほど、プレッシャーだった。だから、この大学を受験したとき、まさか、4月からこの大学に通うとは全然思っていなかった。もう少しレベルの高い大学に入学できると思っていたから少しはざかしくも思った。今、考えてみれば私もただ、いい大学にはいい所に就職することだけを考えていたように思う。

ウ. 今のような学歴社会になった原因の一つには、「親のミエ」が挙げられる。私は、子供たちが最初から教育や学歴に対して欲望を持っているとは思わない。生きていく途中で大人たちに学歴について吹き込まれたのだろう。私個人が今、思うことは、ただの高学歴社会を作ることではなく、義務教育より上は、本当に行きたい人だけがいくのであり、親のミエでも世間の波にも流されて行くのではないということ。でもこれはきれいゴトであろう。きっと私も、心のどこかで、多くの人と同じように、高学歴社会の波に飲みこまれているかもしれない。

キ. 現在の日本が、「学歴社会」と言われる理由が、私にはよくわかります。誰でも簡単にわかる現実であると思います。小学校から、御近所、競争のように塾通いします。実際、私も、その道を通ってきた1人であります。塾に予備校にとあくせく通いました。でも、結果的に私にとって、残っているものは、何もないような気がします。一般的に考えて、世間の親は、この学歴社会について、ただ、「子どもが高学歴を得ることで将来は安心だ」という考えに安心しきっている傾向にあると思います。周りがそうだから、同じようにしておかなければ、世間についていけなくなるとあたふたしている人もいます。子どもの将来に対する不安をまぎらわすための人も多くいると思います。

ノ. 今の日本社会では、学歴が高いと社会人になったときには賃金格差が生じてくる。例えば、高校卒業の人と大学まで卒業した人とは、大学卒業した人の方が賃金も上になるし、会社の中での位置も上になる。このように、有名な大学に入ったというだけで就職などに有利であるという考え方になってしまったのは、子どもを育てる「親」に最も原因があると考えられる。親が子どもの希望を無視して、有名学校に入れさえすれば、これで子どもの将来は安心だろうと考えるからであろう。

以上の記述に共通する主題は、「親の見栄」あるいは「親のエゴ」であろう。「親の高望み」と書いた者もいたし、「他人からうらやましがられることを何よりも喜びを感じる人が、この現代社会でいかに多くなったか」と批判する者もいた。たしかに、身の上話を語る個人が学習塾に通わされ、進学競争へ参加させられ、大学まで進学した原因は、その親の見栄や期待などに求められるにちがいない。そもそも、塾の月謝を払うのは親なのである。したがって、上記の諸答案は、それが真実あるいは本心であるか否かは別としても、個人の来し方の分析としては成立するのである。また、多くの記述者によって反復されていることから明らかに、「親の見栄」あるいは「親のエゴ」によって子どもが受験競争に巻き込まれるというとらえ方が、社会的なリアリティを獲得していることはたしかであろう。

ここでの諸記述は、一種の抑圧の言説である。「子どもの気持ちを無視」した親（大人）による抑圧が語られているのである。しかし、具体的に何が踏みにじられたのかは不明瞭で

ある。つまり、どのような抑圧が加えられるかに関しては雄弁に語られているのだが、そのために何を失ったのかについては沈黙が守られているのである。むしろ、親たちによる受験勉強の強制が抑圧であると語ることによって、反作用的に、子どもの領域のようなものが析出されているようである。エゴや強欲や見栄にまみれた大人との対極に、それによって汚され傷つく子どもという形象が措定されているのである。

ただし——たとえ身の上話という形で語られようとも——そのような理解の仕方自体も、主体たる答案記者者の自由意志の産物ではない。それは、社会的に反復された言説を構成しているのである。すなわち、自分ではなく周りの大人たちが〈学歴社会〉に拘泥しているのだと語るという営み自体が、ある意味で制度化されているということである。抑圧されている内容が空虚であるにもかかわらず、「子どもたち/自分たちが〈学歴社会〉によって抑圧されている」と語らされているのである。

結局、この形態の言説は、心情的な次元におけるリアリティを構成しているのであろう。具体的に言えば、言説が、不明瞭な閉塞感に形を与えていると考えられるのである。すなわち、〈学歴社会〉ないしはそれを支える「親のエゴ」を非難することによって、不明確な被抑圧内容に具体的な輪郭を追補していると考えられるのである。何が抑圧され、何が阻害されたのかは明示できないものの、「親のエゴ」や〈学歴社会〉という抑圧者を存在させることによって、自らの閉塞感の内容を知ることが可能になるというわけである。言説の反復が、心情的な次元において、それ自体としては言語化できない閉塞感に形を与えてくれているのである。ただし、このことは、大学生という、語る言葉をもった集団にしかあてはまらないかもしれない。そうでない場合、この言説を取り払ってしまったなら、後に残るのは「ムカつく」という身体感覚しかないのかもしれないのである。

IV. おわりに

以上、〈学歴社会〉について、欲望の次元、道徳の次元、心情の次元でそれぞれ成立していると考えられるリアリティを考察してきたわけであるが、本稿は、あくまでも暫定的な研究報告にすぎない。しかも、ここでなされている類型化は、形態学的方法に準拠しているにはちがいないが、実証的な根拠に基づくものではない。また、分析の内容も、試論あるいは仮説の域を脱していない。したがって、それらは、厳密な意味での教育社会学的検証に耐えうるものではないであろう。ただし、本稿による研究資料の例示は、無意味なものではないであろう。なぜなら、学歴社会にたいするリアリティを言説編製の視点から考察する試みは、今後も必要であろうと思われるからである。

(やくしいんひとし・帝塚山学院大学文学部助教授)

※本研究は、平成9年度 文部省 科学研究費補助金(奨励研究A09710155)による研究成果の一部である。